

会員寄稿

土崎港っ子の自伝記 (前半の部)

大島 錬三

(昭和29年工業化学科卒)



八王子の片隅で暮らす81才の老兵の自伝として、今号を幼少時から60才まで、次号は60才以降の活動を紹介いたします。

生まれ育った所は土崎港、生家は床屋でその三男。小学生の頃、夏はトンボ捕りや田んぼの小川で雑魚捕り、冬は下駄スケートにスキーと元気に遊ぶことが大好きな少年でした。

中学生時代は草野球に明け暮れ勉強は二の次でしたが、3年生の二学期が終わる頃になって高校受験の志願面接がありました。秋田工業高校の機械や電気は難関だが“工業化学科なら新設2年目につき可能性あり”と指導され受験、やっとの合格でした。

通学は市電で土崎から市内・大工町へ、2軒隣りで2年先輩の機械科・戸嶋功さんと一緒に通いました。2年先輩までは旧制中学時代に

入学した方々で、そのレベルは県内ナンバーワンと言われた秋田高校と同じレベルの学力で、その証拠に戸嶋先輩は柔道部に所属しながら東北大学工学部に現役合格したほどでした。

この戸嶋先輩に勧められ、入学4月には柔道部へ入部。ところが1年生は自分一人、連日のように2・3年生に投げられ、首を絞められ、逆手の練習台でした。ふた月ほどを経て柔道部をやめ、ゆるい練習の軟式野球部(今は県内トップクラスとか)に入り二塁手として県大会に出場し学生生活を楽しみました。



秋田工業高校3年生だった頃

高校3年の秋、就職先の希望を書くように言われ「卒業生名簿」を見たら、東京芝浦電気(現名は東芝)が多かったので、JR川崎駅西口にある堀川町工場(現在は本社のみ)を希望し入社できました。入社理由は兄姉が東京に居り、マツダランプの名称を自宅の電球で知っていたからです。初任給は7千5百円で食事は工場食堂の麦飯を三食食べ、住まいは独身寮が順番待ちのため三畳間を借りての生活。

好きな映画は月2回位がやっとという位で、背広を買えたのは入社2年目、まだ戦後の名残が多い時代でした。

3ヶ月の工場実習を終え配属されたのが工場内に同居していた研究所の化学部門。10年位を経て約千名位の大世帯となり、東芝総合研究所(略称が総研)に昇格しました。この総研で化学系商品の試作販売を7年間担当し、その後接着剤や電気を使わない化学めっきなどの研究に従事。昭和40年頃、プリント配線板用銅張積層板のテレビ向け高耐電圧用接着剤を開発・実用化し、その研究成果を土光敏夫社長の前で発表。土光社長(後に経団連会長)の元気な頃で、小柄でしたが鋭い目が印象に残っています。

接着剤と化学めっきの研究はプリント配線板製造に直結し、その研究は全ての電子機器がコンピューター化するための半導体(LSI等)を受け止める多層プリント配線板(以下、基板と略称)の技術開発に役立ちました。その頃、東芝全社の基板委員会が発足し、若手技術者による熱い将来構想の討議が行なわれ、これを本社トップにその意見を具すべきとなりました。現業が大切な工場と違って、研究所は中立的な部門だから君が担当専務に説明しろとなり、若干33ながら本社役員会の御前説明で「これからエレクトロニクス化時代に備え半導体開発/投資は当然だが、それを受け止める基板にも大きな投資が絶対に必要」と懸命に説いた。聞き終わったN専務曰く「投資はするが、まず君が先陣となってやれ!」と言われた。昨日までの研究を中断して日比谷公園前の本社ビル(当時に連日通り、本社企画部の若手主任たちに加え新らに任命された本部長(事業部長相当)と事業計画を作り、建設先工場選定や設備投資を答申。その結果、東芝府中工場へ3億5千万円(現在の20億円相当)の設備投資を行い、エレクトロニクスの一端を担う産業用基板工場を建設。数年を経て技術・品質レベルの向上を以って社内全工場に供給が出来ました。

製造部門で技術→品質保証→設計と歴任中のある正月休み、技師長宅で製造課長と設計課長(私)の3人で飲みながら事業発展への意見を語り合いました。その頃、電気回路図から基板設計を行う作業の電算化が始まっていました。ご存知の如く大企業では、設備購入には予算申請を期末に行なうのが通例で小回りが利きません。酔った勢いと若さで「これからの設計はCAD化(computer-aided design)/コンピュータ支援設計)の時代」だから別会社を作って設計事業展開をすべきだと熱弁を奮いました。

正月休み明けの翌週、事業トップのN部長から指示があって、君たちの意見通りにCADで設計する別会社を直ちに作って事業を引っ張れと指示されました。本社に会社名を答申し、東芝回路部品エンジニアリング(株)の社名でその4月には私(社長)と総務課長(府中工場出向)が会社設立や技術者集めに奔走し、府中工場の門に近いビルの一角を借り事業をスタート。社員数も1年を経て20人、2年目には50人。3年目には製造部門の一部をショップごと引き受け、社員は100人を超えるました。親元の基板事業が東芝三重工場へも進展、ここも兼務となって社員200人と目が回る忙しさでした。事業が軌道に乗り始めた4年目、親元の同僚と交替し元の職場に戻り、次の任務はハイブリットIC(混成集積回路)事業の部長。数年を経て定年となりました。



生まれ故郷 秋田市土崎の土崎港曳山まつりの様子
(前号Vol.24 よしうす掲載記事より)

補償コンサルタント・一級建築士事務所

 株式会社 償 研

代表取締役 池田 昌憲 (昭和47年建築科卒)

本 社 / 〒010-0062 秋田市牛島東2丁目1番30号
TEL. 018-884-0966・FAX. 018-825-0903
E-mail : main@shoken.tv